であつたが、この頃別に博士を惱ました問題の一つは、研究所の位置を定めることゝその建築とであつた。研究體制や從業員の選定はいふまでもなく煩雜なことであつても、この際博士を煩はすのは止むを得ない事として、まだしも我慢を願ふに値したこととも言ひ得られるが、建築問題で焦心して貰ふことは全く氣の毒至極の儀であつた。折惡しくも嚴冬から春寒にかけての、老體には尤も惡條件の季節に、あの地この地と人の勸めるまゝに敷地を相して廻られた。昭和三年の末頃には、樂友會館の向側に當る舊京都府立第一中學校敷地跡の東北部が、候補地としてほゞ定められたので、博士は何回となく府廳との間に交渉を重ねられたが、結局不調に了り、翌年二月末頃と記憶するが、新たに北白川の新開地を相して位置を定めることになつた。これが今の小倉町の研究所の敷地である。

敷地が決定すると直ちに建築の問題に入り、先づ如何なる樣式のものにするかを定め、それによつて設計を依頼する人を考へることになつたが、これについては理事の濱田君が關心と興味とを持つてゐて、假令他から色々の意見が出ても、容易に讓りさうには思はれなかつたので、自分は博士と話し合つて、この問題はすべて濱田君中心に考へることに方針を定めた。やがて濱田君の考案したのが大體今の研究所の建築の骨子で、その趣味の上から修道院風の樣式を選んだのであつた。これは流石にこの方面に造詣の深い同君のことであるから、今尙ほ多くの人々から賞讃を受けるやうな善い考案であつたが、これについて思ひ出されるのは、同君が狩野博士は兎も角、理事の一人としての自分が之に對して文句をいふのではないかと氣にしてゐたやうであつたことである。それで何回となく圖稿を自分の室に持つて來ては、これでどうだと鉛筆をひねくりながらチラリチラリ上眼づかひに自分の顏色を見るのであつた。もともと自分は洋館といへばあの箱をさしたやうな建築ばかり出來るのに恐れ入つてゐたので、